



▲総会で挨拶する天野会長（右から3人目）

定期総会

今こそ 方谷さんに学べ！

二五〇名、総会、記念講演、パネル討論に参加

今年の定期総会を四月三〇日、山陽新聞社さん太ホールで開いた。二五〇名が参加。総会に続いて記念講演、パネルディスカッションを行った。

まず、天野会長が開会の挨拶で、



第 4 号

2012 年 8 月 1 日



全国大会
奥州白河大会のご案内
十月十九日～二十一日

記事、第 6 面

定期総会

記念講演 能勢初枝氏

安徳天皇は生きていた

会員、能勢初枝氏「写真下」に自著を基に「もうひとつの平家物語」安徳天皇は生きていた」の講演をしていただいた。発端は一通の遺書が江戸末期、大阪の北端、能勢で見つかったこと。それによると壇ノ浦で入水したと信じられていた安徳天皇が生きたがらえて摂津の国、能勢まで逃げてきたと書いてあった。

彼女がそれを紐解き、平家物語に書かれた安徳天皇の姿(髪)に二つの矛盾した記述があることから身代わりは事実であろうと説明した。安徳天皇が壇ノ浦で入水しなかったという伝説は全国各地にあるが、文書として残っているのは大阪府能勢町だけとのこと。



史を掘り起こす活動をしていきたいと提起した。

その後、昨年の活動報告、決算報告、そして今年度の活動内容、予算、十八名の新役員が提案され、承認された。今年の事業は探訪会三回、会報三回発行、グループ活動支援、岡山県内の歴史関係団体調査、ホームページの充実等である。

歴研 展望

季節はまたたく間に移り、前号発行の三月の春から早や夏になりました。

当会の活動は順調に進み、会員数は二四〇名を突破しております。

本年度は、四月に定期総会、五月に探訪会、六月には運営委員会を開きました。

運営委員会では会報編集委員会に加えて、ホームページの ICT 委員会、関係団体調査のデータベース委員会、活動の企画立案の企画委員会の四つの常設委員会の設置を決定しました。

運営委員会の皆さんの叡智を結集して岡山歴研の活動を充実していきたいと考えています。

秋には、山田方谷さんの足跡を辿る高梁・新見方面の探訪会を予定しております。そして、昨年の全国歴研、吉備の国岡山大会に続いて奥州白河大会が開かれます。多くの方々のご参加を期待しております。

当会発展のために今後とも皆様のご理解、ご協力、ご尽力をお願い申し上げます。

(会長 天野勝昭)

定期総会

パネルド
ィスカッション哲人●●
山田方谷を語る

江戸末期の松山藩(高梁市)の財政再建を行ったことで知られる山田方谷について「山田方谷に学ぶ会」の渡辺道夫代表をコーディネーターにして会員の網本善光氏、加古一朗氏と「方谷さんを広める会」応援連絡会の田中里味氏の四人でパネルディスカッションを行ってもらった。

激動の幕末から明治初期にかけて活躍した山田方谷の思想や改革手法



▲パネラーの田中、網本、加古の3氏(左から)

を学ぼうとする動きが地元岡山をはじめ全国へ広がっている。陽明学者、漢学者、漢詩人、政治家、教育者など、多くの顔を持つ方谷の人間形成はどのようにしてなされたのか、根本思想はなにか、自己規律は何か等、色々の面から方谷を熱く語っていただいた。

さらに山田方谷に一番魅せられる点、一番伝えたかった点について四人に改めて書いていただいた。



▲パネルディスカッションでコーディネーターを務める渡辺道夫氏

渡辺道夫氏(コーディネーター)

【方谷に一番魅せられている点】

山田方谷(文化2(1805)年(明治10(1877)年)は、幕末の儒者の中で、春日潜庵と並び称さ

れる著名な陽明学者です。方谷は、国事に奔走した罪で安政の大獄に連座した春日潜庵を助けました(藩主板倉勝静を通じて赦免に尽力)が、

潜庵がこれを知ったのは随分と後のことで、潜庵は、「方谷こそ恩を売らない真の友だ」と述懐したと伝えられています。方谷は、その著『理財論』の中で、「義を明らかにして利を計らず」と言っています。彼は現実生活の中で、常に、義とは何かを追求し続け、実践しています。人に恩を売らない「至誠の人」方谷の生き方に魅せられます。現代のように閉塞感が漂い、出口が見えない時代には、方谷のように真に信頼できる人間の英知や生き方に学ぶことが大切だと思います。

【一番伝えたかった点】

方谷は、嘉永3年(1850)年に藩政改革に着手していますが、安政2年(1855)の時点で、「士民撫育の三急務策」を上申し実行に移していることは驚きです。三つの策とは、①改革着手のとき断行した藩士の減俸を取り消す、②農民には年貢を軽減し、難渋村には救済策を

講じる、③町人には資金を融通し、交易を盛んにする、です。

これまでの努力により藩財政が好転したとはいえ、すかさずこのような施策を打てるところに方谷の凄さがあります。このことは、彼の改革の目的が、領民の生活を安定させることにあったことを如実に物語っています。方谷はこれらの施策を、「至誠惻怛」(誠意を尽くし人を思いやる心)、「士民撫育」(すべては藩士や領民のため)という自身の哲学に基づいて実施しているわけですが、事を成すには確たる哲学が必要なことがよくわかります。

田中里味氏(パネラー)

「学問というも外にはなしこの自然の働きのまま行くのみ」「鳶飛び、魚躍りて天機を漏らす 這裡何ぞ隱微を説くを須いん 上下に著明なるは唯一氣のみ」方谷さんは自然界の万物の働きと同様の無意識性、無作為性、知覚感応の自然さ、その調和的秩序を実現しているその姿を学ぶことこそを学問とした。政

治家として、財政家としていかなる業績を上げたかということも大切なことです。一人の人間が天地宇宙と一体となりきったとき、その人は誠の人間になり得たといえる。(そうなる工夫を浩然の気を養うという。) 方谷さんはこの気を自分のものにする工夫、誠実な人間であろうとする意志と努力を最後まで捨てないで生きぬいた人間でした。自然なるが故に至善。良知の良は善の謂にあらざして自然の謂なり。まさに自然に従い、自然と共に生きた誠の人であつた。

網本善光氏 (パネラー)

【山田方谷に学ぶこと】

山田方谷には、学者・政治家・教育者という、いくつもの顔があります。中でも、「倒産」寸前であつた備中松山藩の藩政改革を行った功績が高く評価されています。

私は、方谷の活動の基礎には、陽明学の裏付けがあつた、と考えています。もつと言えば、方谷は、陽明学を「生き学問」としたのだ、と。

現代の私たちは、論語などを思想の書として学びますが、方谷には、政治や経済、そして、人はいかにあるべきか、というまさに実践の書であつたと思います。

そのキーワードが「直養」です。私たちに元々備わつた自然の働きに従ふことの大切さ。それは、漫然と過ごすことではなくて、「直(ひたすら)」励むことだ、と方谷は教えてくれています。

加古一朗氏 (パネラー)

【一番魅力的なところ】

幕末維新期の動乱の中で、山田方谷は志を立て、それを成し遂げるため不断的努力を行い、それを生涯続けていくことができた人物であること。それでいて、他者に対しては限りない優しさを持っている。門人三島中洲が方谷を評して「毅、請ふ至誠惻怛(しせいそくだつ)」の四字を以ってその晴(ひとみ)に点ぜば、先生の未だ亡びざるの精神を見るに庶幾(ちか)からん(毅は求める。まごころといったみ悲しむ心の文字を

その瞳に点すれば、方谷先生の未だに絶えることのない精神を見るにちかいだろう」と書き残している。日本の長い歴史の中でも希な混沌とした時代を爽快な春風のように駆け抜けた方谷の原点はここにある。

【一番伝えたかったこと】

山田方谷は彼が生きた同時代にどう評価されていたのかを見つめ直してほしい。例えば、山形藩主水野家に仕えた儒学者塩谷宕陰(しおのやとういん)が親友安井息軒(やすいそっけん)と当代の人物を議論した時、息軒は水戸藩の藤田東湖を推したのに対し、宕陰は方谷を推し、「方谷は東湖の人物に学問を加へたる者」と称した。また、会津藩士南摩綱紀は「百姓皆山田の生祠を建る程悦服す」と記している。方谷最晩年の門人村上作夫は「世を出て世を忘れず、世にありて世の外に遊ぶ」と方谷を評した。おそらく方谷自身は他人の評価の外にあって「気の哲学」を貫き通したと思われるが、方谷の実像を立体的に理解するには必要なことだと考えられる。

「方谷さんを広める会」 応援連絡会が発足

去る三月八

日、岡山全日

空ホテルで

「広める会」

応援連絡会が

県内の財界、

文化関係者ら

十五名が出席

し、発足した。

島透氏



▶「広める会」交流
会で挨拶された山田
方谷6代目子孫の野
島透氏

NHK大河ドラマ化に向けた運動を支援する。記念講演会と立食の交流会には約二百名の参加があつた。

世話人の一人で県建築士会長の藤井義和(当会会員)さんは「難局を乗り越えた方谷の手腕に学ぶところは多い。偉業を広め、地域活性化の起爆材としての」と話す。岡山歴研は「広める会」の県民運動の一翼を担って定期総会のテーマとした。

古代吉備探訪会

古代吉備探訪会主宰 **上原 道弘** (当会顧問)

古代吉備探訪会は平成 13 年 4 月に発足しました。その契機は岡山市沢田の操山公園里山センター主催のイベント“操山古墳めぐり”でした。そのセンターでは、市民ボランティアが操山の自然や史跡を活用する様々なイベントを企画しています。古墳めぐりに参加された方々は古代史に関心を持たれており、操山以外の遺跡も探訪したいという要望が強く、主宰者の上原をリーダーに本会を発足させる運びとなりました。現在でも操山里山センターのイベントを通じて当会へ参加される方々がいます。

発足後は岡山県内をメインに月 1 回のペースで遺跡・史跡・名勝探訪や季節の花巡り、滝巡り、特産品の買物、各種イベントや講演会への参加、忘年会など多岐に亘る内容で活動を楽しんでいます。また春と秋にはバスツアーも企画し、県外（奈良や出雲等）への探訪も実施しています。会員数は現在約 90 名で、50～70 歳代の方が中心です。

当会のホームページは、例会写真集や巨樹巨木探訪・磐座探訪の会のブログへのリンクもされています。「古代吉備探訪会」で検索すればヒットしますので是非ご覧下さい。会には特に規約や入退会規定も無く自由参加ですので、興味ある方はホームページの掲示板へお書き込み下さい。



第251回安芸国東部特別例会の一齣
松尾地区復元建物



遺跡探訪は何なのか

古代吉備国を語る会会長 **出宮 徳尚** (当会顧問)

古代吉備国を語る会は、吉備地方の原始・古代史の実態を、現地の遺跡と遺物からの再検証に取り組み、「吉備史」の共通認識を、市民サイドで普及に努めています。広く市民一般とともに遺跡・遺物の見学会・公開勉強会（語る会）・公開講演会等の活動を行い、古代を主とした地域の歴史の提起と文化財の価値の認識を図り、もって地域史研究と文化財保護に資することを目的としています。このため年 6 回以上の遺跡現地見学の例会と、専門研究者を講師に招いての夏季特別講演会を開催しています。これまでに、257 回の例会と 28 回の講演会を行ってきました。

当会の設立は、43 年前に遡ります。当時発生していた武道館建設事件（津島遺跡保存運動）の陰で、研究者の認識の希薄であった吉備の跡の一箇所である東高月遺跡群（現赤磐市南西部）が県営団地の開発地（山陽団地）となり、事態を憂慮した地域史の研究者が、遺跡群の重要性と市民参画の地域史の学習の必要性を訴えたことに、基づいています。

会の運営は、会則と会費による会員制を採らず、一般市民の自由参加としていて、井勘定の体質となっています。「会員制にすれば、役員が執行権を持って意図や意志を会員に強制するようになり、市民の立場の活動にはそぐわない」とした、設立時の市民団体としての理念を今も固執しています。

岡山歴史研究会設立時の回顧

副会長 山崎泰二

岡山歴史研究会の設立総会は平成22年の秋、後楽園の鶴鳴館で挙行された。これに先立つ3月、竹本氏(天野氏の実姉)の仲立ちで全国歴史研究会三名と天野氏、山本氏が初めて面談し、全国大会を岡山で開催する話が持ち上がった。

そして6月「歴史を楽しむ会in岡山(32名参加)」を企画。鬼ノ城を取り上げ、講演と探訪を実施した。その後、私を含む有志8名で設立準備会を結成して会合を重ね、やっと思いで設立総会に漕ぎ着けた。

参加人員の見当がつかない中、会場の設定、記念講演のテーマ、講師の選定、運営スタッフの確保が当面の課題。その頃からすでに一年後の全国大会を岡山でとの話だった。大勢の県外者を迎えるの全国大会は今から準備しても大変なこととの空気が。しかし私は開催地の地元実行委員会は臨時的受け皿団体ではなく、将来に繋ぎうる団体として立上げ、



▶第7回設立準備会(2010年10月4日、一宮公民館)

その団体が現地の実行部隊になるべきと主張した。全国大会開催は絶好のチャンスと。議論も出尽くした頃、中心人物の天野氏の賛同も得て私の主張、方向で進めることに決まった。次に会員をどのように増やすかが大きな課題。準備会のメンバーの脈には限りがある。当初、心ある仲間からは岡山の歴史的風土では多くある団体に押しつぶされ「労多く益は少ない」との忠告も受けた。岡山には岡大を中心に考古学研究会なる学術団体が全国に発信している。それ以上にセミプロの歴史家を自認する活動団体も多い。歴史の認識は考古学から民俗学まで幅が広い。これだけ多士済々の皆様を纏めることは不可能である。そこで、「纏めよう

としないこと」、「専門家と一般人との繋ぎ役に徹すること」、「既存の各専門分野の活動を尊重すること」との姿勢を打ち出した。そして、それらの人達の団体やグループの活動家に設立発起人になっていただく案が頭に浮かんだ。設立発起人の筆頭に柴田一先生、在野で活動している佐藤光範氏や野崎豊氏にも仲間に入ってもらった。設立発起人は顧問として就任戴きこの会の指導的立場で支えて頂くことにした。

会場は後楽園の鶴鳴館。和室であれば参加者の増減をうまく調整できる。費用も格安で眺望も良い。基調講演のテーマ「後楽園の魅力」とも合致する。講師は白井洋輔先生。先生は中世が専門で、元岡山県立美術館副館長。司会は稲見圭紅氏に、私のエコ研仲間であり気持ち良く引き受けて頂いた。天野氏を会長に、私と本松氏が副会長、天野氏の身内で当初から関わりのある山本氏が事務局長となり、体制も整った。会員191名の予想外のスタートとなった。

東京スカイツリーと江戸一目図屏風

五月に開業した東京スカイツリーの展望台に津山藩お抱え絵師・鍬形蕙斎が画いた江戸時代(1809年制作)の鳥瞰図「江戸一目(ひとめ)図屏風」の複製が展示され話題になっている。本物は津山郷土博物館に所蔵(岡山県重要文化財)され描き込まれた名所や風物から特定できる地名が540力所を超えることが分かった。同館では江戸一目図の解説本(A5判127ページ、千部出版した。又、鍬形蕙斎を主人公で津山城を舞台にした小説「隈取絵師」が第三回朝日時代小説大賞に選ばれ、朝日新聞出版から発売(単行本千五百円+税)。お薦めの本である。著者は平茂寛さん(55)本名佐藤和久さん(当会会員Ⅱ県職員)です。

第三回 探訪会 5/19 新熊野神社、由加山、藤戸寺周辺

探訪会を企画して井上秀男(運営委員)

第三回の探訪会は倉敷、児島方面の史蹟めぐり。去る五月十九日、バス一台、五十名で行いました。史蹟の下見や資料作りで、近くに貴重な文化財が残っているのに驚いた。由加山蓮台寺の客殿にある円山応挙、柴田義薫、古市金峨等の日本画。石造美術では総願寺の宝塔、五流尊瀧院の後



鳥羽上皇の宝塔、藤戸寺の五重層塔など歴史の重みを感じました。ゆっくりと見ていただければ、一つでも記憶に残ればと念じました。

▲五流尊瀧院三重塔

お知らせ 第四回 探訪会 山田方谷の足跡を辿るバス旅行

山田方谷の足跡を辿るバス旅行を行います。新見市大佐では、当日は方谷さんが大佐に来られた日であり、当会の企画に合わせイベント「方谷まつり」(方谷さんを広める新見の会主催)を開催し歓迎してくれ

ます。ご期待下さい。

十月十三日(土)

新見・真庭・高梁方面

行き先 新見市大佐町→真庭市北房→高梁

グループ会が発足

【五島列島ドンザの会】五月十七日、十二名が発足した。

『日本国家の起源 五島列島に実在した高天原』(松野尾辰五郎著)に基づき勉強をする。

担当(野崎豊氏・本松一朗氏・村山三枝子氏)【清麻呂の会】五月二十九日、四名が発足

東日本大震災復興支援大会

奥州白河大会のご案内

する

時 十月十九日(二十一日)
所 福島県白河市

第一日目 式典・記念講演・祝宴

第二日目 見学会①白河関跡・南湖公園・白河小峰城跡を探訪する

第三日目 見学会②戊辰戦争白河口の戦いの史跡を探訪

市中井町→高梁市街地

実施日 十月十三日(土) 八時集合

集合場所 岡山駅西口バス駐車場

参加費 三千五百円(バス代・昼食代等含む)

案内人

・鹿島正道氏(方谷記念館 館長)

・中山亘氏(中津井在住当会会員)

・尾崎久志氏(中井町まちづくり委員会)

・児玉享氏(高梁方谷会副会長 当会会員)

した。

テーマ①清麻呂の事蹟②条里制③古備国の条里制④平安京造営計画資料の比較検討をする。

担当(三宅宏氏・丸谷憲二氏)

開催日(毎月第四火曜日)午後場所 ゆうあいセンター

新たにグループ会を発足したい方は事務局に申出ください。

●おくやみ●当会顧問で熊山遺跡調査研究会副会長で活躍されていた金光久子さん(六五歳)が七月一日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

■編集後記■第四号をお届けします。秋には「方谷さんに学ぼう」と新見・真庭・高梁と足跡を辿る探訪会が又、全国歴史研究会主催の全国大会奥州白河大会が開催されます。多くの方々の参加を期待しております。県下の歴史関連団体調査にもご協力をお願い致します。

発行 岡山歴史研究会
代表 天野勝昭
編集長 山崎泰二
事務局 〒701-11332
岡山市北区平山 844-86 山本方
電話 086-287-6226

